

秋山遺跡 1

—第1・2調査—

平成22(2010)年

太宰府市教育委員会

秋山遺跡 1

—第 1・2 調査—

平成 22(2010) 年

太宰府市教育委員会

序

本書は、太宰府市の東部に位置する石坂一丁目で行われた埋蔵文化財発掘調査報告書です。

調査地は大宰府条坊の東側の独立丘陵上で、遠く宝満山や四王寺山など太宰府市東部一帯を見渡せる高台に位置します。今回の調査は、遺構密度は低いものの、完形の龍泉窯系青磁椀を副葬する墳墓などが確認され、太宰府の墓地変遷を知る上で貴重な所見を得ることが出来ました。

本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用され、ひいては文化財愛護の精神が高揚することを心より願っております。

最後になりましたが、本調査に対しご理解ご協力いただきました、関係各位ならびに諸機関の方々に心からお礼申し上げます。

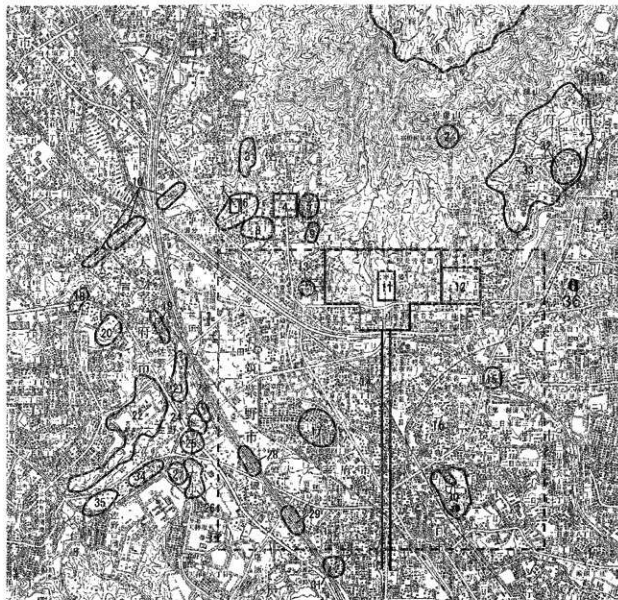
平成 22 年 3 月
太宰府市教育委員会
教育長 關 敏治

例言

1. 本書は大宰府市石坂1丁目、字秋山で行われた秋山遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺構の実測には、国土調査法第11度標系を利用した。したがって本書に示される方位は特に注記のない限りG.N.(座標北)を示し、本文中に記される遺構の角度もこれを基準としたものである。
3. 調査対象地の表土除去および埋戻しは(有)松田造園土木に委託した。
4. 遺構の実測及び写真撮影は担当者が行った。
5. 第1次調査の空中写真撮影は(有)空中写真企画(代表増藤夫)が行った。
6. 遺物の実測は山村、宮崎、柳智子が行った。
7. 遺物の整理・検出・復元作業は馬場由美、住山景子、末永重由子が行った。
8. 出土した金属製品の保存処理は下川可容子(株)タクトが行った。
9. 遺物の写真撮影は山村、宮崎が行った。
10. 図の浄書は、担当者のほか柳、福井門、久家春美が行った。
11. 本書に用いた分類は以下のとおり。
須惠器・・・『古ノ本遺跡Ⅱ—窯跡篇—』(太宰府市の文化財第10集)1992
陶磁器・・・『大宰府条坊跡ⅩⅤ—陶磁器分類—』(太宰府市の文化財第49集)2000
土器・・・『大宰府条坊跡ⅡⅠ』(太宰府市の文化財第7集)1983
瓦質、上質土器・・・『大宰府出土の瓦質土器』山村信榮『中近世土器の基礎研究Ⅵ』1990
12. 執筆は各担当者が行い、編集は宮崎が担当した。

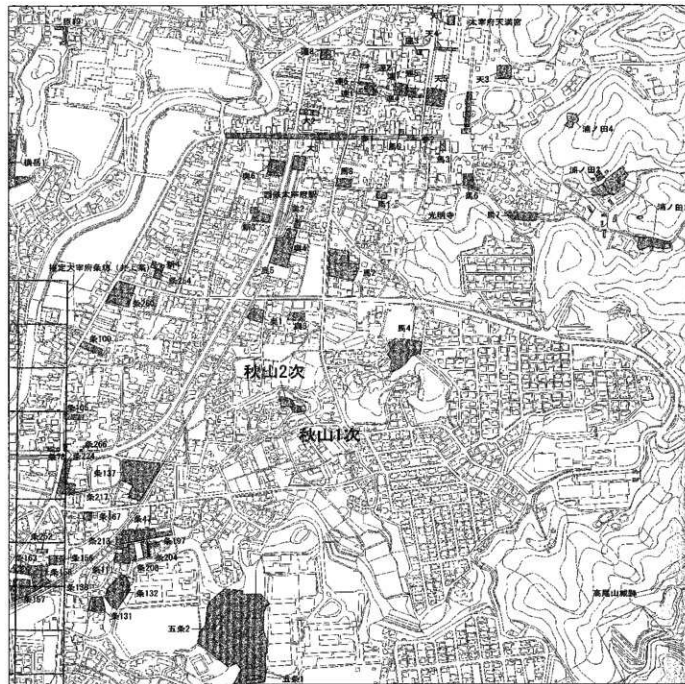
目次

I. 遺跡の位置と歴史	3
II. 調査体制	5
III. 調査および整理方法	5
IV. 調査報告	
1. 第1次調査	6
(1) 調査に至る経過	6
(2) 基本層位	6
(3) 検出遺構	6
(4) 出土遺物	8
(5) 小結	13
2. 第2次調査	16
(1) 調査に至る経過	16
(2) 基本層位	16
(3) 検出遺構	17
(4) 出土遺物	17
(5) 小結	18
V. 調査まとめ	20



- | | | | |
|------------|--------------------|-----------|--------------------|
| 1. 大野城跡 | 10. 水鏡跡 | 19. 原口遺跡 | 28. 銅鑿遺跡 |
| 2. 岩屋城跡 | 11. 大宰府政庁跡 | 20. 橋渡遺跡 | 29. 唐人塚遺跡 |
| 3. 粟ノ尾遺跡 | 12. 観世堂寺 | 21. 前田遺跡 | 30. 釜・釜畑遺跡 (●は烽火跡) |
| 4. 筑前四分寺跡 | 13. 遠賀回印出土地 | 22. 宮ノ本遺跡 | 31. 大宰府天満宮(安楽寺跡) |
| 5. 辻遺跡 | 14. 大宰府条坊跡(鏡山築紫線内) | 23. 豊川遺跡 | 32. 浦城跡 |
| 6. 園分松本遺跡 | 15. 岩塚遺跡 | 24. フケ遺跡 | 33. 原遺跡 |
| 7. 筑前園分尼寺跡 | 16. 船若寺跡 | 25. 尾崎遺跡 | 34. 京ノ原遺跡 |
| 8. 園分千足町遺跡 | 17. 市ノ上遺跡 | 26. 藤道遺跡 | 35. カヤノ遺跡 |
| 9. 御笠園印出土地 | 18. 神ノ前跡 | 27. 殿城戸遺跡 | 36. 秋山遺跡(報告地点) |

Fig. 1 大宰府市とその周辺の遺跡 (1/30000)



凡例

- | | |
|------------|----------------|
| 条・・・大宰府条坊跡 | 天・・・太宰府天満宮遺跡 |
| 新・・・新町遺跡 | 参・・・太宰府天満宮参道遺跡 |
| 奥・・・奥園遺跡 | 連・・・連歌屋遺跡 |
| 馬・・・馬場遺跡 | |
| 大・・・大町遺跡 | |

Fig 2 秋山遺跡周辺の調査地点図 (1/7000)

I、遺跡の位置と歴史

太宰府市は、北に四王寺山、北東に宝満山、南に背振山地東端の天祥山に囲まれ、さながら盆地的な様相を示している。これらの山々が途切れている北西に福岡平野が、南東に筑後平野が広がっている。二つの平野に挟まれた狭い平地を古代には官道が、現代では鉄道や高速道路が通り抜け、今も昔も交通の要衝となっている。

今回報告する秋山遺跡は市の北東部に位置し、調査地からは北東600mほどにある太宰府天満宮の社叢である天神の森を見ることができる。太宰府天満宮周辺いわゆる宰府地区は宝満山と四王寺山の谷筋になり、その中央を宝満山を源流とする御祭川が流れている。その両岸には沖積低地と沖積段丘面が形成されている。沖積低地では遺構は確認できないが、沖積段丘面やその外側の丘陵地では遺構が確認されている。旧石器は浦ノ田遺跡などで出土しているが、遺構として確認されるのは縄文時代になってからで、平野部では奥園遺跡第4・5次調査や新町遺跡第3次調査で縄文時代前期の遺物と埋蔵遺構などが検出されている。太宰府天満宮東側の丘陵の谷部では、浦ノ田遺跡第1・2次調査で、縄文時代早期の遺物と集石が検出されている。弥生時代～奈良時代にかけての遺構は散在するものも立った広がりはない。

古代に四王寺山南側一帯では、北端に大宰府政庁を置き、前面にいわれる大宰府条坊と呼ばれる都市が整備された。その規模は南北22条、東西12坊におよび、南辺部は筑紫野市まで広がっている。この宰府地区は条坊の外側に位置し、馬場遺跡や奥園遺跡では、条坊の設計と異なる方位を示す平安時代後期の濠が検出されている。また、連歌屋遺跡や奥園遺跡の主な遺構は平安時代後期から現代にかけてのもので、鎌倉時代以降に遺構が増加するため、大宰府廃絶後に急速に開発が進み、現在の町割が形作られたことが理解できる。

平安時代になると安楽寺や原山無量寺が創建され、鎌倉時代には横岳崇福寺、光明寺が創建されている。13世紀になると観世音寺前庭や御堂川南条坊遺跡で鉄造関係の遺物がまとめて出土している。鉾ノ浦遺跡では、13世紀後半～14世紀前半にかけての大規模鉄造遺構が検出され、多量に出土する銕型から先鋒をはじめとする仏具や鍋などの日用品を製造していたことがわかっている。鉾ノ浦は各寺院からやや距離があり、大規模な生産を行っているため、自立した生産集団であった可能性も考えられている。

また、宰府地区を見降ろす周辺の低丘陵地では、中世を中心とした墓地在り確認されている。馬場遺跡は中ノ峰と呼ばれる丘陵の西側斜面に12世紀後半～14世紀前半にかけての木棺墓や七塚墓があり、調査地以外の丘陵部には現在も墓地として利用されている。太宰府天満宮の東側丘陵の浦ノ田遺跡第4次調査では、13世紀後半～14世紀代をピークとする墓地が検出され、段造成を行い、自然石を敷き、板碑を中心とした石塔が建てられた火葬墓が広がっている。五条遺跡第2次調査では、14～15世紀代の石組意を中心に13世紀代の木棺墓も確認されている。

宰府地区の南にある標高151.1mの高尾山山頂付近には、中世に高尾山城が築造され、現在も段造成などが残されている。

参考文献

- 『浦ノ田A・B遺跡』福岡県文化財調査報告書第126集 福岡県教育委員会 1996
『浦ノ田遺跡II』福岡県文化財調査報告書第155集 福岡県教育委員会 2000

- 『浦ノ田遺跡 IV』福岡県文化財調査報告書第 189 集 福岡県教育委員会 2004
 『奥園遺跡』太宰府市の文化財第 64 集 太宰府市教育委員会 2002
 『馬場遺跡』太宰府市の文化財第 41 集 太宰府市教育委員会 1999
 『馬場遺跡 2』太宰府市の文化財第 87 集 太宰府市教育委員会 2006
 『馬場遺跡 3』太宰府市の文化財第 97 集 太宰府市教育委員会 2008
 『連歌屋遺跡 1』太宰府市の文化財第 68 集 太宰府市教育委員会 2003
 『横岳遺跡』太宰府市の文化財第 45 集 太宰府市教育委員会 1999
 『太宰府桑坊跡 XVI』太宰府市の文化財第 52 集 太宰府市教育委員会 2001
 『太宰府桑坊跡 XVII』太宰府市の文化財第 53 集 太宰府市教育委員会 2001
 『太宰府市史 考古資料編』太宰府市 1992

II、調査体制

○第 1 次調査

(平成 20 / 2008 年度)

総括	教育長	關 敏治
庶務	教育部長	松田幸夫
	文化財課長	齋藤廣之
	保護活用係長	菊武良
	調査係長	永尾彰朗
主任主査	吉原慎一	齋藤実貴男
調査	主任主査	城戸康利 中島恒次郎
		山村信榮 (調査担当)
	技術主査	井上信正
	主任技師	高橋 学 宮崎亮一
	技師 (嘱託)	柳 智子 下高大輔 大塚正樹

○第 2 次調査・報告書発行

(平成 21 / 2009 年度)

総括	教育長	關 敏治
庶務	教育部長	山田純裕
	文化財課長	齋藤廣之
	保護活用係長	菊武良
	調査係長	永尾彰朗 (～6月30日)
		井上 均 (7月1日～)
主任主査	吉原慎一	齋藤実貴男
調査	主任主査	城戸康利 (都市整備課併任)
		山村信榮 中島恒次郎 井上信正
	技術主査	宮崎亮一 (調査担当)
	主任技師	高橋 学
	技師	遠藤 茜
	技師 (嘱託)	柳 智子

III、調査および整理方法

調査および整理方法については、『太宰府佐野地区遺跡群 I』(太宰府市の文化財第 14 集 1989)、『太宰府市における埋蔵文化財調査指針』(太宰府市教育委員会 2001 年 9 月改訂)に基づいている。

測量基準点は、岩屋山にある国土座標第 11 座標系の基準点から、光波測量機によって、調査地に座標を振り込み、調査を行った。遺物取り上げ用の略図を 1/100 で作成し、遺構分布図および土層図等は 1/20 で記録した。墳墓等については一部を 1/10 で実測している。

調査整理後、図面および遺物は太宰府市文化ふれあい館に所蔵保管している。

IV、調査報告

1、秋山遺跡第1次調査

(1) 調査に至る経過

大宰府市石坂1丁目3175-1において行った個人住宅の建て替えに伴う発掘調査である。調査は平成20(2008)年4月9日～5月8日にかけて国庫補助事業として実施した。調査面積は212㎡である。調査はバックホーで表土除去後、対象地全面で行った。

(2) 基本層位

遺跡は大宰府奈坊跡の北西外側にある、標高55mほどの花崗岩風化土が沖積作用によって周辺が流された後の見晴らしの良い残丘上に位置する。遺構は既存建物を解体した後に整地された表土層下約30cmで検出された。遺構形成面は1面で、遺構を覆う包含層は地山面が低くなる北東側の一部に粘性のある茶褐色土が存在する。

(3) 検出遺構

土坑

1SK002 (Fig.5, Pla.4)

調査区の南東、B4区で検出された遺構で、土層は2色に分かれるが、大半は茶灰色土で一気に埋まっている。長さ1m以上、幅0.7m、深さ0.45mを測る。南北に長い2段掘りの形状になっている。糸切りのある土師器坏の小片が出土しているため、12世紀以降の所産と考えられる。

1SK005 (Fig.5, Pla.5)

調査区の中央、D5区にある。長さ1.9m、幅1.4m、深さ0.2mを測る。茶色の粘質土で埋没し、床面には炭粒が広がっている。その上に土器が散在する。地山面は熱を受けた痕跡は見られなかった。南側の壁は垂直に近い立ち上がりを見せる。8世紀後半に位置づけられる。

溝

1SD001 (Fig.5, Pla.6)

調査区の北端の東西約10mの幅で広がる遺構で、茶灰色の弱粘質の土壌で埋没する。土地の境に関係する遺構の可能性も考えられる。幅は1.5m以上で北側の立ち上がりは調査区外になる。

墳墓

1ST010 (Fig.5, Pla.7・8)

調査区の中央、E5区にある南北に長い遺構である。長さ0.7m以上、幅0.7mを測る。深さは深いところで10cmほどしか残存していない。明茶色粘土で埋没する。南端で白磁碗が出土しており、頭位は南側か。釘が西側で2本、東側に1本縦方向で出土している。木棺蓋で木蓋を留めていたものと考えられる。12世紀前後の所産。

1ST020 (Fig.6, Pla.8・9)

1ST010の南東3mの位置のC4区で検出された南北に長い遺構である。長さ1.6m以上、幅0.7mを測る。北側で土師器小皿1枚、刀子と思われる鉄製品1点が出土している。頭位は南側か。釘などは見られず、組み合わせ式の木棺墓か。12世紀前半の所産。

1ST030 (Fig.6, Pla.9)

調査区の北東側、F3区にある東西に長い遺構である。長さ2.2m以上、幅0.6mを測る。茶灰色土で埋没する。釘状の鉄製品が2点出土したことから墳墓と考えられる。棺などの痕跡はわからなかった。

1ST040 (Fig.7, Pla.10・11)

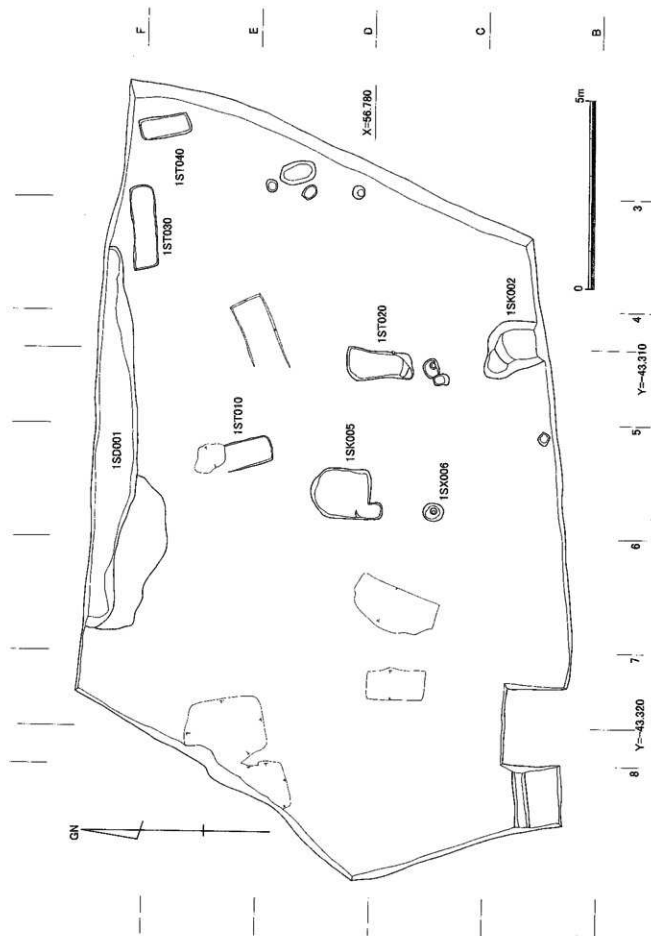


Fig.3 第1次調査遺構全体図 (1/100)

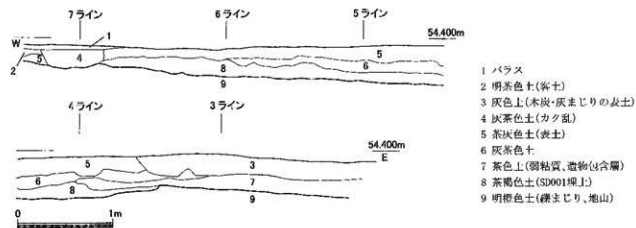


Fig. 4 第1次調査北壁土層実測図 (1/40)

調査区の北東側、F2区にある南北に長い遺構である。長さ1.4m以上、幅0.55m、深さ0.35mを測る。茶色粘土で埋設する。釘は出土しておらず、北端で龍泉系青磁碗1点、上師器小皿4点が出土している。13世紀前半以降の所産である。

その他の遺構

ISK006 (Fig. 7, Pla. 11・12)

C5区で検出された直径0.5m、深さ0.37mの二段掘りによる柱穴であり、柱痕跡が確認された。IST020の南側にも同じような大きさの柱穴があるが、埋設土が灰色土で時期が異なる可能性があり、その展開は不明である。

(4) 出土遺物

ISK005 出土遺物 (Fig. 8, Pla. 15)

須恵器

蓋c (1) 口径12.7cm、器高2.7cmを測る。やや中心が盛り上がる積みを持つ。口縁端部は緩やかに折れ曲がる。天井外面には回転ヘラケズリは施されていない。色調は灰白色を呈し、焼きは硬く良好な還元焼成。8世紀後半以降の大宰府土器編年第IV期の所産である。

大蓋c (2) 口径22.4cm、器高3.4cm以上を測る。積みのある折れ曲がる。口縁端部は緩やかに三角形の形に折れ曲がる。天井外面には回転ヘラケズリが施される。色調は白灰色を呈し、焼きは軟質な還元焼成。8世紀中頃以降の大宰府土器編年第III期以降の所産である。

ISD001 出土遺物 (Fig. 8, Pla. 15)

土師質土器

摺鉢 (3, 4) 同一固体の可能性があるので、3は器高4.0cm、4は器高5.4cmを測る。口縁端部が水平になるAIVタイプの形状を成す。太い掘り目が底部と体部との境から上に入れられている。焼成は酸化雰囲気だが、芯は黒色化している。14世紀以降の所産である。

瓦質土器

摺鉢 (5) 器高5.4cm以上を測る。太い掘り目が入る。灰黄色を呈す軟質な焼きで、やや酸化気味である。14世紀以降の所産と考えられる。

国産陶器

甕 (6) 灰色を呈し器高8.8cm以上を測る大型のもので、強めに屈曲する肩の部位と考えられる。肩の上は緑色がかつた灰色の自然釉がかかる。東海系のものであると思われる。

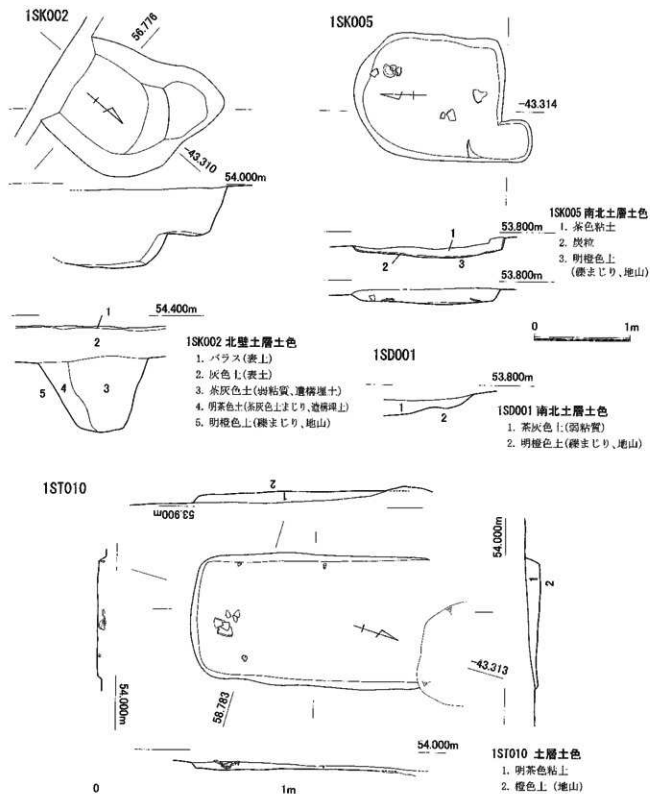
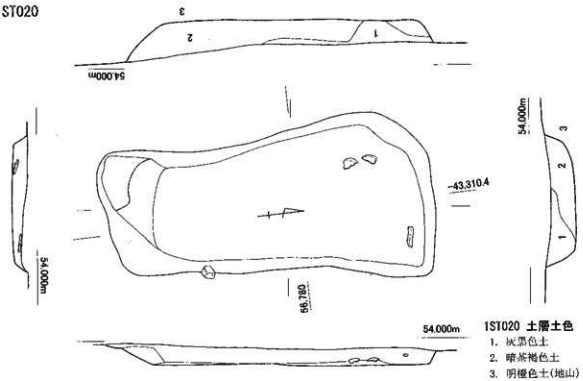


Fig. 5 ISK002・005 (1/40)、ISD001 (1/40)・IST010 (1/20) 遺構実測図

1ST020



1ST030

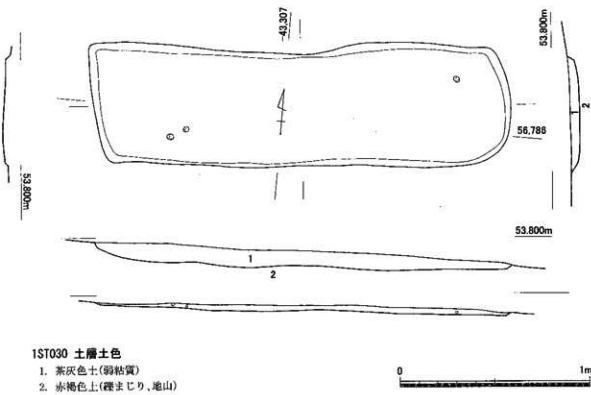
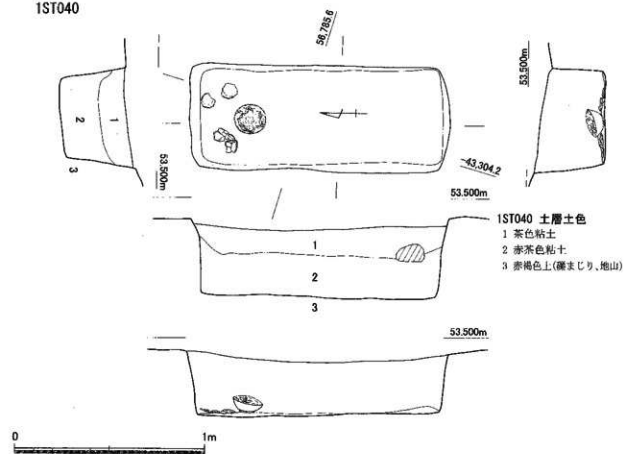


Fig. 6 1ST020・030 遺構実測図 (1/20)

1ST040



1SX006

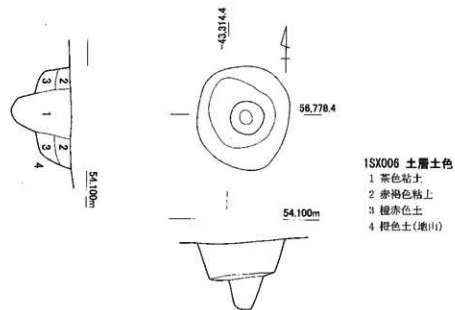


Fig. 7 1ST040・1SX006 遺構実測図 (1/20)

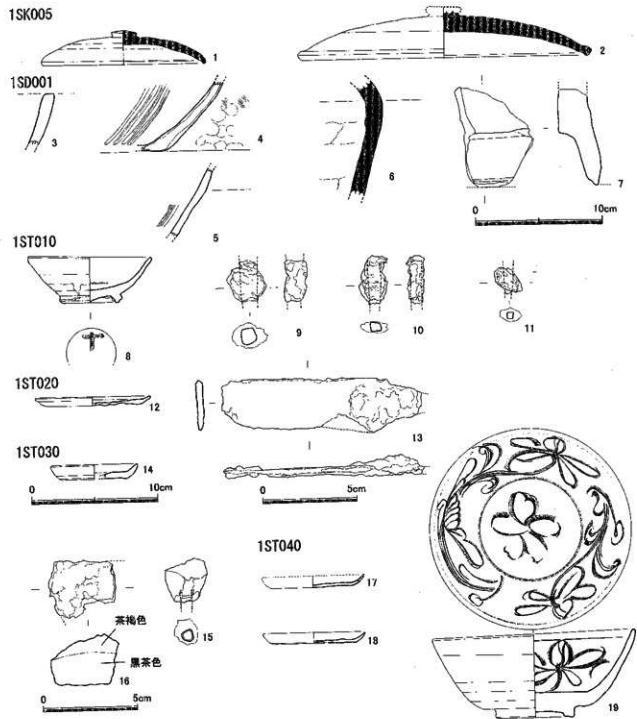


Fig. 8 第1次調査出土遺物実測図 (1/2・1/3)

瓦類

丸瓦 (7) 灰色で軟質の瓦質焼成によるもの。長さ7.6cm、高さ3.3cmが残る。玉縁は先細りする形状を呈す。内面に吊り紐の跡のような窪みがかろうじて見られる。中世後期の特徴を持つ。

IST010 出土遺物 (Fig. 8, Pla. 15)

白磁

小皿 (8) 口径9.7cm、器高3.6cm、底径4.5cmを測る。乳灰色の緻密な胎土に光沢のある灰白色の釉薬が掛けられる。化粧土はなし。素地はロクロ回転を利用したヘラケズリが施される。C期の特徴を持つ

つ木分類のもの。底部外面に「十」の墨書が施されている。

金属製品

鉄釘 (9~11) 断面形状が方形の鉄釘で、9は長さ2.2cm、幅1.5cm、厚さ1.2cm、10は長さ2.6cm、幅1.5cm、厚さ1.0cm、11は長さ1.4cm、幅1.4cm、厚さ0.8cmを測る。それぞれ水平から斜方向に木目が観察される。10には折り曲げた頭が残っている。棺の蓋を留めたものと思われる。

IST020 出土遺物 (Fig. 8, Pla. 15)

土師器

小皿 a (12) 口径9.0cm、器高0.7cm、底径7.8cmに復元される。やや玉縁風の口縁を持つ。底はヘラ切りによるものか。摩耗して判別しにくい。板状圧痕は明瞭に残る。大宰府 XIV 期頃の所産か。

金属製品

刀子 (13) 長さ10.6cm、身幅3.0cm、厚さ0.4cmを測る。切っ先の形状は丸くなるように見える。茎は先細りになったところで欠損している。小刀のような形状を呈す。

IST030 出土遺物 (Fig. 8, Pla. 16)

土師器

小皿 a (14) 口径6.7cm、器高1.2cm、底径5.0cmに復元される。短く立ち上がる口縁を持つ。底部切り難しは糸切りによる。1/5程度の小片のため口径はさらに大きくなる可能性はある。

金属製品

鉄釘 (15) 断面形状が方形の鉄釘で、長さ2.3cm、幅2.2cm、厚さ1.3cmを測る。釘の幅は0.6cm。腐食が著しい。

鉛滓 (16) 欠損しているが表面は茶褐色の鉄錆状で芯は黒茶色を呈す鉛物質の滓である。秋山遺跡では滓の出土はこれしかない。

IST040 出土遺物 (Fig. 8, Pla. 16)

土師器

小皿 a (17, 18) 17は口径8.1cm、器高0.9cm、底径6.4cm、18は口径8.1cm、器高0.9cm、底径6.8cmに復元される。体部は薄く、短く斜位に立ち上がる口縁を持つ。表面は一切残っていないほど劣化している。13世紀中頃(大宰府 XVIII 期頃)の所産か。

龍泉窯系青磁

碗 I-2b (19) 口径15.4cm、器高6.7cm、底径5.8cmを測る。内底に1つの花文と体部には2つの花文と1つの草文が施される。灰白色の緻密な胎土に光沢のあるオリブ色の釉薬が掛けられる。内底部に集中して線上の細かな傷が見られ、摺るような作業に使われた可能性がある。

(5) 小棺

遺構は、古代では奈良時代前半~中頃に位置付けられる炭層を伴う土坑 ISK005 があり、中世後半期のものと考えられる溝 ISD001、平安時代後期以降のものと考えられる深めの土坑 ISK002 (12世紀以降)、木棺墓ないしは土坑墓と考えられる IST010・020・030・040 などが検出された。掘り方の長軸方向はおおよそ正方位に制約を受けて展開し、IST010 と 040 は軸方向が多少西に傾く。墓の形成された時期は出土土器から12世紀から13世紀に位置付けられる。ISK002 は出土遺物が少なく12世紀以降の所産としかいえない。ISD001 は出土遺物から14世紀後半以降の中世後期と考えられる。

このようにこの場所は奈良時代に遺構の形成が始まるが、その段階での遺跡の性格は本調査だけでは明確に出来なかった。桑坊の施工がなされた段階で、周辺の丘陵部にまで開発が進んでいたといえる。

平安時代後期から中世前期にかけては墳墓の形成場所として利用されている。時期の主体は大宰府陶

磁器編年C～D期にあたる。本地点から約200m北東で調査された馬場遺跡第4次調査は西に傾斜する丘陵地に展開した墳墓であるが、その時期の主体は大宰府陶磁器編年D期にあたる13世紀代に置かれるもので、本遺跡の後半からさらにもう一時期新しい段階までのものを含んでいる。大宰府条坊の北東部ではちょうどこの頃に条坊道路の改築が見られる時期であり、都市経営に関わる主体者が入れ替わりつつある段階といえる。そういった意味では都市住民の動向を考察する上では貴重な発見となった。

その後は土坑1SK002や東西溝1SD001が散在して集落的な様相を呈していたようであるが、後代の土地の開平によって多くの情報が失われており、詳細は掴めなかった。溝1SD001にはこの時期には希少な瓦を含むことから、この台地の上に拠点的な建物があつた可能性も考えられる。なお、北側の土層観察によって現代の畝状耕作の痕跡が遺構に遺しており、宅地化される以前は畑地であつたことがわかつた。

参考文献

- 『馬場遺跡』大宰府市の文化財第41集 大宰府市教育委員会 1999
 『大宰府条坊跡40』大宰府市の文化財第107集 大宰府市教育委員会 2009

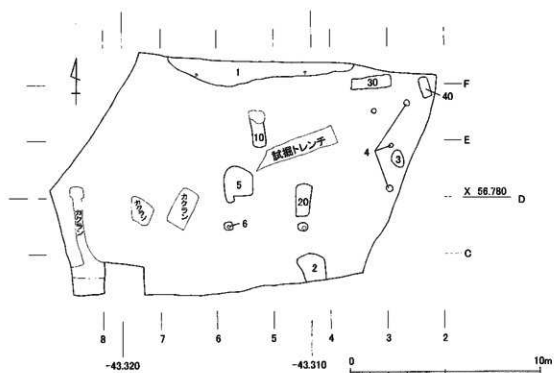


Fig.9 第1次調査遺構略測図 (1/200)

表1 第1次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	埋土ほか	時期	地区番号
1	1SK001	溝	茶褐色土	14世紀～	F3～F6
2	1SK002	土坑	茶灰色土	12世紀～	B4
3		Pit			D2
4		Pit群			D2
5	1SK005	土坑	茶色粘土	8世紀～	D5
6	1SK006	Pit	茶色粘土		C5
10	1ST010	木棺墓		12世紀～	E5
20	1ST020	木棺墓		12世紀～	C4
30	1ST030	木棺墓?		12世紀～	F3
40	1ST040	木棺墓		13世紀～	F2

表2 第1次調査 出土遺物一覧表

S-1	灰 灰土 磁器片	S-30	土 土 銅小皿a(1)
	白 陶 陶人糞(赤地不明)		土 陶 陶片(1)
	灰 陶瓦(無文、破しあり)		金 銅 品(磁器(1)、鉄釘(1))
	石 瓦 灰石瓦(1)		
S-2	灰 土 陶器 磁器?	S-40	土 土 銅小皿a(1?)
	土 陶 陶片a(1) 壺		陶器 陶器 磁器? 1 壺
S-5	灰 土 陶器 磁器? 大甕C		
	土 陶 陶器?		
S-10	土 陶 銅何種品		
	白 陶 磁器; 磁片(木分粉)		
	金 銅 銅 品(磁器(3))		
S-20	灰 土 陶器?		
	土 陶 銅小皿a		
	金 銅 銅 品(磁器)		

2. 秋山遺跡第2次調査

(1) 調査に至る経過

調査地は太宰府市石坂1丁目3175-2で、標高54m、東西250m、南北100m程の独立丘陵で、現在は丘陵地であるが住宅街になっており、旧観を残しているのは北側と東側の斜面だけとなっている。

調査地はその丘陵の最高点から僅かに北側に下った場所、北側の展望がよく、宝満山から四王寺山、五条から宰府にかけての市街地を望むことができる。

調査は平成20(2008)年5月19日に問い合わせがあり、平成20(2008)年6月13日に試掘調査を行い、僅かであるが遺構が確認された。計画は専用住宅であるが、遺構に達する掘削工事が行われる計画のため、事前に発掘調査をすることとなった。発掘調査は平成21(2009)年6月3日から6月15日にかけて実施した。試掘調査は高橋学が行い、調査は宮崎亮一が担当した。開発対象面積は444㎡で、調査時に表土を除去し、遺構が確認された部分だけを調査した。調査面積は108㎡である。

(2) 基本層位

真砂土など宅地整理時の盛り土が0.6m程あり、その直下に耕作土とみられる茶褐色土が0.2mほど広がる。それらを除去すると遺構が確認できる。遺構内は烏樞ルームのような黄褐色土で、調査地の南半分は削平を受けていた。黄褐色土直下には火山灰のような7mmほどの灰色粒を含む層が確認できた。また、調査区の西側は0.8m程段落ちし、耕作土とみられる茶褐色土が段に沿って堆積しているため、耕作時はこの敷地内では2枚の畑地があったと想像できる。

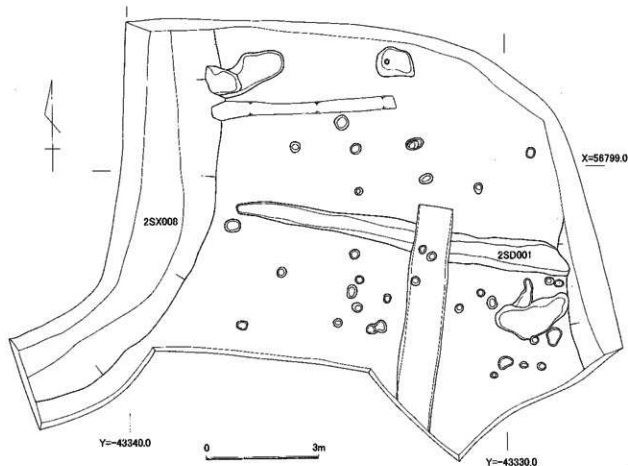
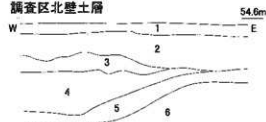


Fig.10 第2次調査遺構全体図 (1/100)

調査区北壁土層



- 1 真砂土とバラスと黒灰色土
- 2 真砂土
- 3 黄褐色土と炭と黄褐色ブロック土
- 4 赤褐色土
- 5 茶褐色土(耕作土か?)
- 6 黄褐色土

- 1 暗灰色粘質土(SD001)
- 2 暗灰色粘質土
- 3 灰赤褐色粘質土
- 4 黄褐色土
- 5 暗茶褐色土(やや粘質)
- 6 灰赤土に7mm前後の灰色粒多く混じる
- 7 黄褐色土
- 8 黄白色土

0 2m

調査区地盤土層



Fig.11 第2次調査地層実測図 (1/50)

(3) 検出遺構

溝

2SD001

検出長9.0m、最大幅0.85m、最も深い所で0.19mの東西溝で、方位は $W-10^{\circ} 7' 30'' -N$ である。断面は浅いU字形を呈し、西側に向かって底面のレベルは高くなっていくため、遺構は西側に浅くなり消滅している。埋土はやや粘質の暗灰色茶土である。

(4) 出土遺物

遺物は殆どなく、黒曜石の剥片、須恵器と土師器の破片が僅かに出土しただけである。よって、ここには形状が推測できる遺物を全て掲載した。

溝

2SD001 出土遺物 (Fig.12, Pla.16)

土師器

環a×小皿a (1) 底部の小片で、かなり磨滅している。色調はやや黄色い白色で、胎土は0.5cm程の灰色粒を含んでいる。

小皿a (2) 底部まで残っている小片だが、器高1.0cmを測る。しかし、底部が僅かのため若干不明瞭さに欠ける。胎土は僅かに白色砂粒を含み、色調は黄灰色を呈する。

段落ち

2SX008 (茶褐色土) 出土遺物 (Fig.12, Pla.16)

国産磁器

碗 (3) 口縁部や高台を欠損する。白色に全面施釉され光沢がある。外面のみ黒茶色釉の文様が施されている。素地は白色で不純物を全く含まない。軸調具合から近現代のものと推測される。

瓦類

軒丸瓦 (4) 小片で、瓦当の文様は不明である。残存部分の表面は淡暗灰色で、いわゆる燻し瓦である。胎土は1mm前後の白色砂粒を含み粗い。

第2次調査その他の出土遺物 (Fig.12, Pla.16)

遺構の時期とは無関係であるが、以下のような時期に人の動きがあったと考えられ、周辺に同時期の遺構の展開も予想される。

須恵器

環c (5,6) 5は復元高台径10.5cm。色調は明るい灰色で、胎土には微細な白色砂粒が含まれている。

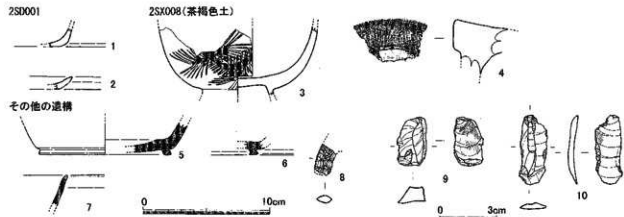


Fig. 12 第2次調査出土遺物実測図 (1/2・1/3)

SD001 出土。6は高台部の小片で、整形時に押しつぶされている。高台部付部分は使用により若干磨減している。色調は暗灰色で、胎土には僅かに白色砂粒が含まれている。S-4 出土。

坏 (7) 口縁部で、端部調整で僅かに外反する。色調は内面淡灰色、外面暗灰色で、胎土に目立った砂粒はなく精製されている。2SD001 出土。

石製品

石鏃 (8) 石鏃の基部の破片で、その形状から基部を挟りこんだ鍔形の鏃に還元され、縄文時代早期頃のものと考えられる。残存長 1.65cm、幅 0.9cm、厚さ 0.45cm。S-2 出土。

剥片 (9、10) 9は長さ 2.6cm、幅 1.55cm、厚さ 0.9cm、石材は黒曜石。S-4 出土。10は縦長剥片で、長さ 3.7cm、幅 1.4cm、厚さ 0.3cm。石材は黒曜石。S-6 出土。

(5) 小結

鳥栖ローム層とみられる黄褐色土とそれを覆う茶褐色土で形成されている地盤で、そこに溝とピットが掘られている。溝からは須恵器の坏cが、土坑からは黒曜石の剥片が出土しているが、遺物量が希少のため、それらの遺物が遺構の埋没時期とは言い難い状況である。溝 (SD001) は七師器の小皿の小片が出土したことから平安時代後期以降に埋没したと推測される。また、西側の段落ち (SX008) も磁器碗の出土から、2枚の畑地を近現代に整地し現状の土地に近い形になったと推測される。今回の調査では、遺構が希薄だったため、この土地利用を想像することは難しいが、東隣の第1次調査では本館裏が確認され、東側の隣接丘陵の馬場遺跡第4次調査でも當地が確認されるなど、この周辺の丘陵地は墓地としての利用が多く、この第2次調査の遺構・遺物状況からも居住域でなかったものと推測される。

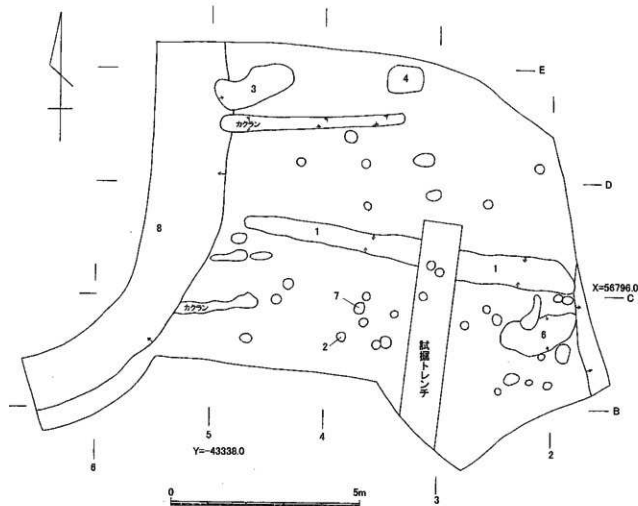


Fig. 13 第2次調査遺構略測図 (1/100)

表3 第2次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	埋土ほか	時期	地区
1	2SD001	溝	やや粘質の暗灰茶色土	平安後期～	C2～4
2		ピット	灰茶色土		B3
3		土坑	やや粘質の暗灰茶色土		D4
4		土坑	やや粘質の暗灰茶色土		D3
6		土坑	やや粘質の暗灰茶色土		B2
7		ピット	やや粘質の暗灰茶色土		B3
8	2SX008	段落ち	最下層は茶褐色の耕作土	近現代	5ライン

表4 第2次調査 出土遺物一覧表

S-1	須恵器 銅鏡、坏、坏c	S-6	石製 品(黒長剥片(黒曜石))
S-2	石製 品(石鏃)	S-7	土製 銅鏡破片
S-3	石製 品(剥片(黒曜石))	黄褐色土 (S-8)	国産磁器類(須恵代)
S-4	須恵器 銅鏡c	灰	朝鮮瓦(破し瓦)
	石製 品(剥片(黒曜石))	表土	
		須恵器 銅鏡破片	
		土製 銅鏡破片	

V、調査まとめ

今回の調査の主な所見は以下の通りである。

- ・木棺墓を4基検出（第1次調査）
- ・遺構と遺物が共に少ない（第1・2次調査）

今回の調査地の北東200mの中ノ峰丘陵で調査された馬場遺跡第4次調査では、12世紀後半～14世紀前半にかけての墳墓が6基検出されている。それらは木棺墓もしくは土槨墓で陶磁器と土師器小皿を供献している。現在丘陵こそ分断されているものの、近接した位置にあること、そして葬法と供献形態は同じであることから、中ノ峰丘陵と秋山の丘陵は、ほぼ同じ墓地であったと推測され、丘陵自体が当時はひと続きであった可能性も考えられる。

また、馬場遺跡第4次調査は、調査範囲内では火葬墓こそ検出されていないが、火葬施設や空風輪が出土するなど火葬墓の存在を窺うことができる。太宰府天満宮の東側丘陵の浦ノ田遺跡第4次調査では、13世紀後半～14世紀代をピークとする墓地が検出されている。段造成を行い、自然石を敷き、板碑を中心とした石塔が建てられた火葬墓が広がっている。五条遺跡第2次調査では、14～15世紀代の石組墓が中心であるが、13世紀代の木棺墓も確認されている。

このように見ていくと、鎌倉時代には五条から宰府の町を望む東側丘陵のほとんどが、墓地として利用されていたことがわかる。秋山遺跡周辺の丘陵は現在住宅が建ちこんでいるが、鎌倉時代の火葬墓もあった可能性は否定できない。

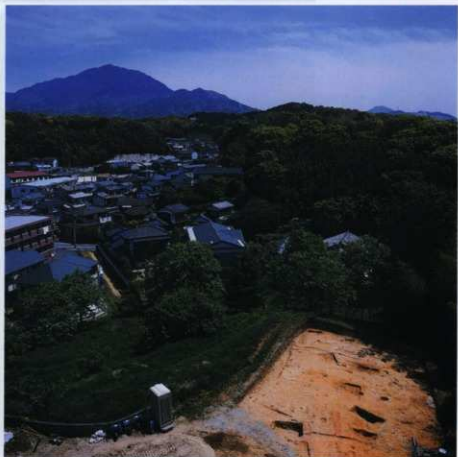
墓地として利用された後についての検討は難しいが、秋山遺跡一帯が丘陵頂部という立地と表土直下で遺構が確認される状況から、削平されている可能性が高く、遺構や遺物の出土が少ないことも合わせると、恒常的な居住域としての利用は低かった可能性が高く、主に畑地などの利用の方が高かった可能性が高い。

写真図版

第1次調査区全景
(下が北)



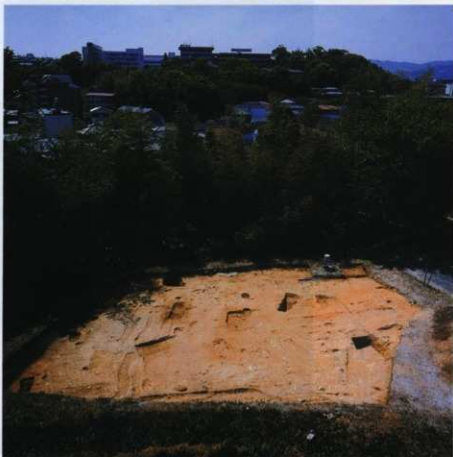
第1次調査区と周辺
(西から、遠くは宝満山)



第1次調査区全景
と周辺（左が北）



第1次調査区遠景
（北から）





第1次調査区完掘時全景（北西から）



第1次調査区完掘時全景（東から）



1SK002 完掘状況（西から）



1SK002 東西土層状況（北から）



1SK005 完掘状況 (西から)



1SK005 南北土層状況 (西から)



1SD001 北壁土層状況（南西から）



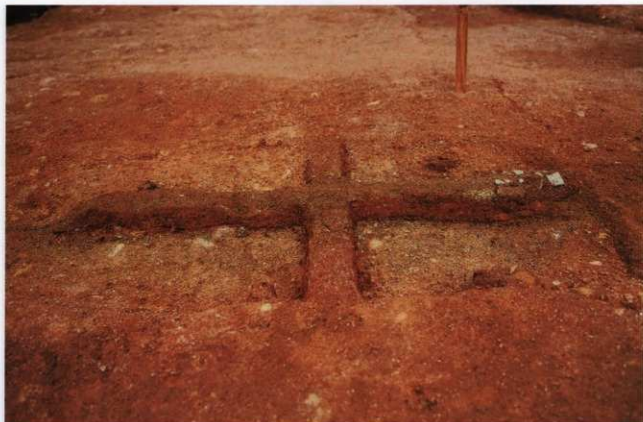
1SD001 南北土層状況（西から）



1ST010 完掘状況 (西から)



1ST010 東西土層状況 (南から)



1ST010 南北土層状況（西から）



1ST020 南北土層状況（西から）



1ST020 東西土層状況 (北から)



1ST030 完掘状況 (北から)



1ST040 完掘状況 (西から)



1ST040 南北土層状況 (西から)



1ST040 東西土層状況（北から）



1SX006 完掘状況（東から）



1SX006 南北土層状況（西から）



第2次調査遺構検出状況（南東から）



第2次調査遺構完掘状況（西から）



第2次調査遺構完掘状況（南東から）



第2次調査 SD001 と地盤土層状況（北西から）



第2次調査区北壁土層状況（南から）



8-1

1SK005 出土遺物



8-2

1SK005 出土遺物



8-3

8-4

8-5

8-6

8-7

1SD001 出土遺物 (外側)



8-3

8-4

8-5

8-6

8-7

1SD001 出土遺物 (内側)



8-8

8-9

8-10

8-11

1ST010 出土遺物 (外側)



8-8

8-9

8-10

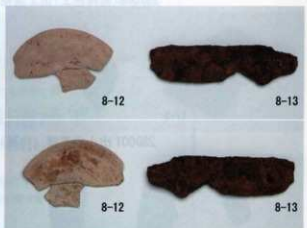
8-11

1ST010 出土遺物 (内側)



8-8

1ST010 出土白磁底部の墨書



8-12

8-13

8-12

8-13

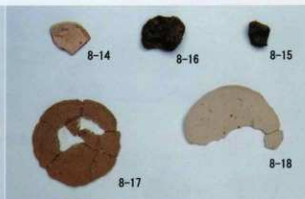
1ST020 出土遺物 (上: 外面、下: 内面)

(左) 磁器出土品写真集

(右) 磁器出土品写真集



1ST030・040 出土遺物 (外面)



1ST030・040 出土遺物 (内面)



1ST040 出土遺物



1ST040 出土青磁碗内底部の傷痕跡



2SX008(茶褐色土)出土遺物



2SD001 出土須恵器 (内面)



2SD001 出土須恵器 (外面)



第 2 次調査出土石器 (表)



第 2 次調査出土石器 (裏)

報告書抄録

ふりがな	あきやまいせき										
書名	秋山遺跡 1										
副書名	秋山遺跡第1・2次調査										
シリーズ名	太宰府市の文化財										
シリーズ番号	112集										
編著者	宮崎亮一、山村信俊										
編集機関	太宰府市教育委員会										
所在地	福岡県太宰府市観世音寺1丁目1番1号										
発行年月日	2010（平成22）年3月31日										
ふりがな	象坊	ふりがな	コード		座標		調査期間		調査面積	調査原因	
所収遺跡名	【秋山推定案】	所在地	市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了	m ²		
あきやまいせき		太宰府市									
秋山遺跡 第1次	象坊外	石坂1丁目	402214		56780.00	-43310.00	20080409	20080508	212	専用住宅建設	
あきやまいせき		太宰府市									
秋山遺跡 第2次	象坊外	石坂1丁目	402214		56796.00	-43338.00	20090603	20090615	108	専用住宅建設	
所収遺跡名	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物		特記事項				
秋山遺跡 第1次	墓地		木棺墓 土坑		龍泉窯系青磁 白磁						
秋山遺跡 第2次	集落	古代	溝		須恵器 土師器 割片						

太宰府市の文化財 第112集

秋山遺跡 1

平成22(2010)年3月

編集・発行 太宰府市教育委員会
太宰府市観世音寺1-1-1印刷 信光社印刷有限公司
福岡県朝倉市一本32-1